

大澤真幸「我々の死者と未来の他者 ー戦後日本人が失ったものー」 を読んで、改めて定常性について考える

「我々の死者と未来の他者 ー戦後日本人が失ったものー」⁽¹⁾の主題は、「<未来の他者>に応答することと、<我々の死者>を見いだすこととは緊密に一体化した作業だ」という点にあるとみてよいだろう。大澤氏の説明によると、「ある結末は、過去に起こったことからの必然的な結果だ」と捉えるのが一般だが、そう言えるのは、結末が起こってしまっただけのことであるから、起こった結末が違っていたら、今まさに起こっていることがら同一であったとしても、それに異なる必然性が見いだされることになる。このことから、未来の他者が「ある結末をもたらした現在の我々の行動を評価する」その評価のあり方は、現在の我々が「ある結末をもたらした過去の人々の行動を評価する」こととつながっていて、そのことを認識しない限り、未来の他者に我々が応答することはできないことになる。

それはそうなのだが、本書の視点は、未来の立場から現在を見る視点を仮想することで現在の行動を変えようとする、すでに議論されてきたフューチャーデザイン⁽²⁾の考え方を越えて、そういう視点を持つことの困難性がテーマとなっていると考えなければならないだろう。つまり、未来の他者に応答することは、なぜ「死者」を見いだすことでなければならないのか、ここに重要なポイントがあるようにみえる。すなわち、「起こってしまった過去のことがらを見いだすこと」は、具体的には、「その思うところがどうであったからにかかわらず、犠牲となって死んだ者を見いだすことでなければならない」、ということなのだろう。つまり、起こってしまった結末からさかのぼって、その結末と必然的な因果関係を持つことがらはさまざまだろうが、そのことがらに含まれる「犠牲となった死者」をどのように評価するか、その評価こそが、今起こっていることがらや今生きる我々の行動が未来の他者にとって何を意味するのかというテーマを、「考えるべき価値のあるもの」に為し得るキーポイントだということになる。

本書においては、先の大戦でアジア侵略を起こした日本人が個人的に信じたかどうかにかかわらず戦いを正義としてとらえて中国等での虐殺を含む戦争に従事して死んだ、その日本人の死者を、敗戦時点を境にして、日本人である我々が「我々の死者」として見いださない問題を指摘している。後生大事に戴いていた正義が一瞬にして過ちに消えてしまうこの傾向は、「義のない戦争だった」と戦後の誰かが言って「そうだ、そうだ、その通りだ」と同調してしまうことを意味する。だから、同調しにくい人は、「トカトントンが聞こえてきてあほらしくなる」そうした状況に追い込まれる。

戦争時には虐殺をした日本人および戦争で犠牲になった日本人のことを総括的に評価することなく、彼らと現在の我々日本人との間が切り離されている。そうであれば、中国等で虐殺された人々やその子孫の立場からすると、仮に現在の日本人が謝罪しても、「謝り方が足りない。賠償金を増やせ」と言いたくなるし、日本人は「もう十分謝って多額の賠償金も

払った」という態度になって、不毛な言い争いが続く。なぜなら、戦争で虐殺に加担したり犠牲となったりした日本人の死者は、我々とつながっておらず消えているのだから、虐待の犠牲者にとって謝られている根拠が不明のままだし、日本人は腹では謝る必要はないと思っているからである。この虐殺に加担し犠牲となって死んだ日本人が我々と切れている以上、未来の他者にとって過去となっているところの現在の我々の行動は、未来の他者にとっての結末を必然的に生み出したというような水準に達しない。

以上のことから、自らと過去において当然つながっている者が受けた「犠牲」をなかったことにしては、当時虐殺された他国の犠牲者とつながっている他者との間での過去の清算もできないし、ましてや、未来の他者に応答する行動もできない。よって、本書の冒頭に掲げられているように、現在の日本人は、未来の他者の負担を強いる気候温暖化を抑制する行動がとれない、ということになるわけである。

*

ここから、私が本書に刺激を受けて考えた「未来の他者への応答の欠如」に関する考察を書いてみたい。「自然の定常性」がキーポイントとなる。

さて、本書に書かれている「起こった結末が違っていたら、今まさに起こっていることからは同一であったとしても、それに異なる必然性が見いだされる」という点は、戦争などの人間の引き起こすことがらでは確かにそうなのだが、自然災害などの場合、「起こった結末」は自然現象が変動しつつ繰り返す定常状態の中の一時点のことがらに過ぎない、そういう違いがあるのではないか。

地球上に生息する生物は、地球活動との相互作用を為すことで定常性を維持しして、人間も基盤の生命維持においてはこの歴史貫通的な原理の中にある。社会が発達してきて、定常性を離れた発展をしてきたため、過去の死者と未来の他者の分離が起こってきた。

「我々の死者」が問題になるのは、この分離が生じるからである。

広井良典氏は上田洋平氏の研究を引用して、次のような琵琶湖湖岸の漁師の死生観を記述している⁽³⁾。

私はここで生まれ、ここの水を飲み、ここの食べ物を食べて、ここで育ち、ここの人々の間でこのような役割を担い、ここで老い、やがてここで死ぬでしょう。死んだら先祖に仲間入りして、盆には家族に迎えられ、そのうち氏神になり、そして自然と一体になる。それが私、ここが私の在所です。

ここには、定常状態である村社会においては、その構成員にとって、「我々の死者」も「未来の他者」も自分と同じであって、そういう過去や未来の現在との分離がないことが示されている。太古の話ではないので、この漁師も現実の社会のうつろいを感じないはずはないが、定常社会を守ろうとする人々を明治維新後のネーション（国民国家）が無理やり非定常な経済発展に引っ張り出す歴史があった。この漁師の発言は、元の定常性と経済発展との緊張関係の中での「漁師の叫び」だとみなせよう。

本書では、「柳田國男の失敗」として、人々が明治維新以来のネーションとしての日本を

正義として戴くことによって犠牲となって死んだのに、家や村という伝統的な定常状態を取り戻すことで、その犠牲を意味あるものとして総括して復権させる、こうした柳田のもくろみは無理があることが記述されている。「我々の死者」や「未来の他者」が現在の我々と関係するものとならなくてはならないという概念は、本書に書かれているように、家や村とともに続いてきたものではなく、ネーションとともに出現したものである。だからこそ、戦前のネーションの正義によって死んだ犠牲者が、敗戦後に「我々の死者」とはならないことの問題が本書で議論されているということになるのだろう。

私は、拙著「矛盾の水害の対策」⁽⁴⁾において「自然災害は人間の対策では皆無にできない」ことを戦争などの厄災とは異なる特徴として強調した。この点に基づき、対策として、改良追及を控え維持回復を優先することを提案したのだが、それは、起こりうる自然災害の被害は、「起こった結末が違っていたら、今まさに起こっていることがらは同一であったとしても、それに異なる必然性が見いだされる」厄災ではないという面がある、との発想に基づいている。戦争などの人間の因果関係の結果として起こるとみなさなければならないことがらとは違うわけである。災害をもたらす根本原因である地球活動は、定常性の中で起こる自然活動、すなわち、変動を伴いつつ保たれている地球活動の定常状態に「根本原因」があつて、決して回避できない。定常性の中に必然的に含まれる極端な変動が現災害の原因だからである。たしかに人間による防災対策と被害の規模やかたちとの間に関係性はあるのだが、いかなる防災対策を行ってみても、被害そのものは定常的な自然活動の中で何度も繰り返し生じるのである。

フューチャーデザインで想定される 30 年程度先の時点では、人間によって選択が可能な原発の過酷事故は、起こる可能性が高いと私個人は思うが、必ず起こるとまでは言えない。これに対して、地震・津波・火山噴火・大河川氾濫などの自然災害によって社会が壊滅的な被害を受けるのは確実である。もしかしたら起こらないかもしれないが、定常状態の中で必ず発生する自然現象だという原理は揺るがないのである。

何がここで言いたいかであるが、大澤氏の本の冒頭に掲げられた「なぜ日本人は気候変動問題に対する関心が低いのか？」の理由については、敗戦での「我々の死者」の喪失だけでは十分ではないのではないかと、という問題意識を持つからである。この日本人の特徴は、江戸時代において日本人（主に農民）が自然持続的に利用して当時の社会全体における経済の定常状態を支えていた時代の共有意識と関係があるだろう。また、その意識が明治維新に資本主義経済と植民地主義が導入されて変質したものと維持されたものがあつたことともつながっているだろう。これらは、現在の日本人の「未来の他者」に応答しにくい傾向の原因になっていると、私は考えている。

日本に限らず、自然利用の定常性の維持は人間社会の持続性にとって、世界中どこでも、歴史貫通的に必須である。江戸時代にあつては、経済の基盤は、里山における生物資源の利用に依存していたが、その維持はまさにカツカツであつて、まばらな樹木を持つ山を経てはげ山に至る経済の限界点越えの危機が支配者にも農民にも認識共有されていた。河川の上

流と下流との間や対岸との間で水田用水や生物資源の争奪に関する利害が対立し争いが絶えなかったから、農民ではないが先の漁師であっても、過去未来にわたる定常状態の裏には、生物資源をめぐる激しい対立が隠されていたとみるべきである。

しかし、この対立は相手の村の住民の殺害もあつたとはいえ、戦争によって村ごと叩き潰される、そういう性格のものではなく、対立を含みながら、かつかつとはいえ、何とか定常性が確保されていた、そういう社会であつた。したがって、村落共同体の取り決めに従って勝手なことをせずに役割を果たす限り、飢饉をもたらすような自然災害があつたとしても、それは誰もが責任を取りようのないものだとし、村はその強靱なレジリエンスによって復活する、そういう経過を持つ村々が日本国内に並列共存していたわけである。選択の自由がなく、差別が固定化されて人権が尊重されない窮屈な社会ではあつても、持続性が確保され、かつ、戦禍による虐殺がなかったため、いいとか悪いとかではなく、とにかくまわりを見てそれに倣って自らの役目を果たしていれば、漁師のことばで言えば「この人々の間でこのような役割を担い」さえすれば、「そのうち氏神になり、そして自然と一体になる」ことができたのである。

こうした日本の江戸時代の定常的な社会は、太閤検地や江戸幕府の鎖国を含む政策に依存するのであろうが、海に囲まれた島国であつたことも大きいように思われる。大陸の場合、中国でも欧州でも、社会の定常性が周辺の民族の侵略・蹂躪によって繰り返し破壊されてきた歴史とは異なっている。大陸の民族国家であれば、自国が周辺国家に勝ったときの英雄たちは「我々の死者」となれるし、蹂躪された場合には恨み骨髄の意識が形成され、犠牲者はやはり「我々の死者」に値する。日本人の場合、1945年の敗戦の際に、他の国家に蹂躪されたわけであるが、初めての経験にキョトンとしてしまい、「我々の死者」を失ってしまった。大陸国家のように、他国による蹂躪の再来として捉えることで「恨み骨髄の増幅」として「我々の死者」をますます強める、そういうことにはならなかったのである。大陸にあるロシアもウクライナもユダヤもパレスチナも朝鮮も中国も、恨み骨髄を増殖させて、現在に至っているのとは対照的だと言えよう。

江戸時代の村における「お役目を果たしていれば厄災が起きてても責任はない」という意識は、自然利用の定常性に由来するので、資本主義経済の発展という非定常性とは矛盾する。本書で議論されているテーマ、「起こった結末が違っていたら、今まさに起こっていることからは同一であつたとしても、それに異なる必然性が見いだされる」は、「どのように選択するか」と「どのような結末になるか」とが関係を持つということが前提である。「どのような選択をしてみても、結末は変わらない。周囲に同調して役目を果たせば OK」という、江戸時代の人々の意識とは相容れにくい。現在は、本質的に非定常な資本主義社会なので、「どのような選択をするかによって結末が変わるが、同一の選択であつても、異なる結末に応じた必然性が生じる」のだから、「惰性的な現在の延長線上に予測される未来の結末とは異なる結末から現在の選択を見直す」ことが繰り返される必要があるはずである。ところが、こうした緊張とは最も遠いところに日本がある。だから惰性的な未来しか想定できず、未来

の他者にほとんど応答できない。

気候温暖化は確かに人間活動の発展に原因があるのだから、選択によって結末が変わるのは当然である。しかし、地球は生物を載せつつ、長い時間スケールでの強固な定常性を持ちながらさらに長い時間スケールで変化してゆくので、現在に地球の定常性の中に我々人間を含む生物が生息していることにも注意する必要がある。つまり、地球と生物活動の相互作用は、人間がどうやってみてもどうにもならない定常性（人間に比べて長い時間スケールの定常性）の中での短期間変動であって、その前提の上で、人間の選択が結末をモディファイ（修正）してゆくようなテーマとして、私は気候温暖化を捉えたい。

地球が氷河期と間氷期を繰り返してきた過去数十万年の定常状態が未来に繰り返されるかもしれないし、未来は人間活動の影響受けてかそうでないかは別としても、氷河期は再来しないかもしれない。しかし、人間を含む生物全体と地球との相互作用は、これまでの科学研究の結果として、継続すると見なければならない。未来の結末は、我々人間の選択を含むことがらと必然性があるかもしれないし、ないかもしれない。したがって、ここで言えるのは、地球と生物、両活動の相互作用の定常性の新たな回復をめざす選択をすべきだ、ということしか導かれたいのではないだろうか。

未熟な論考になってしまったが、今後、この過去と現在、現在と未来の問題について、詳しい内容をまとめてゆけるようにしたいと考えている。

文献

- (1) 大澤真幸：我々の死者と未来の他者 ―戦後日本人が失ったもの―、集英社、2024。
- (2) 西條辰義：フューチャー・デザイン ―持続可能な自然と社会を将来世代に引き継ぐために、環境経済・政策研究 11(2)、2018、29-42。 https://www.jstage.jst.go.jp/article/reeps/11/2/11_29/pdf-char/ja
- (3) 広井良典：無と意識の人類史 ―私たちはどこへ向かうのか―、東洋経済新報社、2021。
- (4) 谷誠：矛盾の水害対策 ―公共事業のゆがみを川と森とひととのいとなみからただす―、新泉社、2023。